



軽やかに糸を操る手が、よびみなく動く

高さ2尺強の木製の織機に張った綿製の縦糸に向かい、速く毛糸をへり付けていく。日本で独自に発展した手織りの織物、緞通(だんつう)。代に日本の一大輸出産業だった

200年 織り込む質感

だが、現在は伝承の危機にある。発祥の地を遠く離れた京都・丹後で15人の職人が伝統を守っている。

左端の2本の縦糸に毛糸を8の字型に織り込み、毛足を長めに残して切る。隣の2本でも同じ作業を繰り返して、右端までくると横糸を通して毛糸を固定。毛足を整え、ようやく1段が完成する。この道20年超の職人にかかれれば幅60センチほどの1段が数分で終わるが、1日に織り進められるのは5〜6センチほどだ。

堺緞通は江戸末期に堺の商人が中国から伝来したじゅうたんを応用してつくった。薄さや繊細な模様が特長だ。最盛期には欧米向けを中心に年間89万畳を生産したが、大量生産による品質悪化などで20世紀に入り急速に衰退する。

2006年に大阪府の無形民俗文化財に指定された時には発祥の地の堺市では産業としては廃れていた。堺式手織緞通技術保存協会の職人4人が講習会などをするだけだ。

住江織物は47年、緞通の製造部門を現在の大阪市から丹後に移した。進駐軍の将校などから受注が増えたのに対応し、戦中に閉鎖していた丹後ちりめんの工場を活用した。戦後の需要がなくなると、国会議事堂などへの納入を続けた。今は子会社の丹後テク

カメラマン余話

糸をつかむ、たぐる、通す、引っ張る、切る――。一連の手の動きが素早く繰り返される。しかし面積は一向に大きくならない。1日に織れるのはわずか数センチと聞き、全体の柄が見える構図は諦めた。せめて質感が伝わるようにと、広角レンズでぐっと寄った。

スタイルが事業を引き継ぐ。堺緞通を研究する堺市博物館の堀川亜由美学芸員による

「商品として残る堺式緞通は住江織物だけだ」。最近では13年に運行開始したJR九州の豪華寝台列車「ななつ星in九州」に納入。デザイナーの水戸岡鋭治氏は薄くてしなやかな質感を気に入ったという。職人の安達純子さんは「機械では出せない微妙な風合いが出せる」と話す。

とはいえ、発注は10年に一回あるかないか。普段は機械織りの量産品が出荷の大半を占める。技術者の半数以上が50〜60歳代と高齢化が進んでおり、「培ってきた技術を守る責任がある」(丹後テクスタイルの西尾仁社長)。200年の歴史を未来につなげるため、若手の育成を急ぐ。

文 上田志晃
写真 伊藤航

取材手帳から

工房で手織りを体験させてもらったところ、想像以上に難しかった。左手の中指、小指の3本で毛糸を切るための刃物を持ち、残る7本の指を複雑に動かして織り進める。2本の縦糸は固く張っているため、力を入れてこじ開けなければ毛糸を通せない。手先が不器用な記者は何度繰り返して